

研究主題について

児童一人ひとりが自らの考えを持ち、学びに向かう第一段階を大切にす。まず、「考えを持つ」ための「一人学び」を大切にすることで、授業の展開の中でのペアワークやグループワークが、単なる役割分担によるかかわりや一方通行なかわりとならないようにしたい。その上で、多様なかわりを意図的に持たせることが「主体的、対話的で深い学び」につながると考える。多様なかわりとは、児童同士のかかわりだけでなく、指導者とのかわりやテキストとのかわり、自己内対話による自分自身とのかわりも含まれる。

学びをつなぐのは、児童自身である。もちろん、教師が意図的に関わり、促し、ねらいに向かつて学びをつなぐためのファシリテーションを行う。学びを通して児童同士がつながり、作品がつながり、児童自身が自分とつながっていくことで、子どもたちが、「もっと知りたい」「わかりたい」と自己の学びをつなぎ、自己を高め、よりよく生きる姿をめざしたい。このためには授業での発問・指示が重要な役割を果たす。また、思考を深めるためには、思考ツールやICTの活用によって可視化を図ることも有効である。

学びの必然性がある学習課題設定とは、単に導入時の課題設定だけでなく、グループ活動などの対話をさせる際に、教師の意図する活動となるよう設定する課題も含まれる。また、振り返り活動におけるメタ認知等を促す課題も同様である。

学びの必然性とは、子どもの視点から言えば、「不思議だな」「なぜだろう」などといった考えたくなる、学びたくなる状態のことであり、それは、初めての驚きや既習事項とのズレ、多様な友だちの意見に出合ったときなどに引き起こされる。また、教師の視点から言えば、考えさせ、かわらせ、学びをつなぐ力を育成するための明確な意図があることである。例えば、話し合い活動をさせるのも、課題を共有させるためののか、課題を追究し練り上げるためののかといった意図があるはずである。それを明確に意図して授業を創造することで、学習者が、その課題の必然性を学びとる。

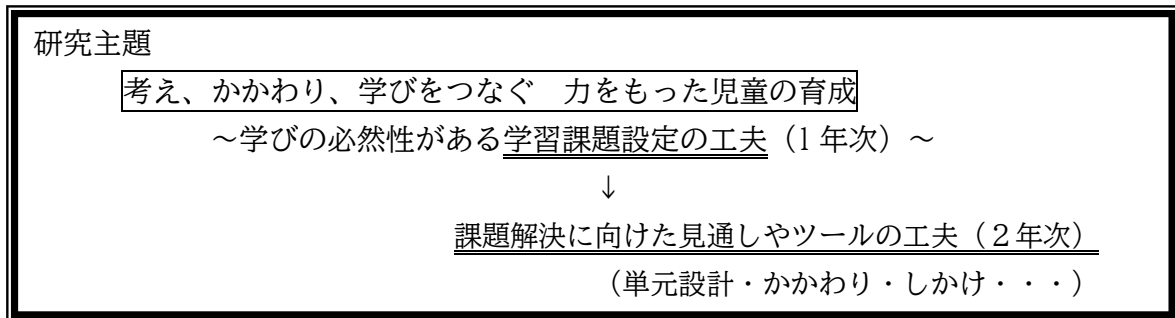
なお、本研究主題は、45分の1授業単位のみをねらいとしたものではない。授業は学校教育の要であるが、一人ひとりの生活の安定やあたたかい学級学年集団づくりが根底にあることはもちろん、授業での学びが様々な学校の教育活動を通して生かされていくことで、よりよく生きる子どもたちの育成をめざしたい。

2年次のテーマ「思考を広げ、深める「かわり」のしかけの工夫」について

昨年度、必然性のある学習課題設定の工夫について各学年1本の研究授業を行い深めた。全校で統一した板書カードを活用しながら授業の構造化をすすめ、板書の構造化も図った。また、様々な切り口から「比較」させることで子どもの意識の連続性が生まれ、必然性のある学習課題の設定へとつながった。2年次は、さらに様々な「かわり」を通して子どもたちが思考を広げ、深めていくために、その「しかけ」の工夫について研究を進める。研究授業では、「かわり」の前後で子どもたちがどのように変容したかを見とることで検証する。

1年次から2年次へのつながり（研究の系統性と階層性）

研究主題サブテーマの骨子



★1年次、考えの部分の特に取り組んだ。



「教えたいこと」を「学びたいこと」へ転換
「与える」から「引き出す」へ

- ・「～しよう」「～考えよう」という活動（行動）目標では、何を考えればいいかわからない。
- ・子どもの意識の連続性を大切にした、
問題→気づき・問い→学習課題 の流れをいかした授業づくり。
＝子どもが考えたくなる課題
見通しが持てる課題
(なぜ?そっくり!だけど、ちょっと違うな?やってみたい...)

学びの必然性のある学習課題設定の工夫

・・・考える必然性、学習意欲を高める「問い」を引き出すために

★2年次は、かかわりの部分の特に取り組む。



<関わりの必然性を考えて...>
かかわりを持たせるために・・・

- ・「一人学び」をしっかりと ＝ 思考ツールの活用等
- ・ペア・グループワークの
タイミング・内容（意図）・設定の工夫（場・時間・人数・・・）
- ・全体 ← ファシリテート

課題解決に向けた、単元設計としかけ。

思考を広げ、深める「かかわり」のしかけの工夫